

学 位 論 文 要 旨

氏 名 中西 裕子

題 目 聴覚障害教員と聴教員が協働した聴覚障害理解に関する研究

本研究の目的は、特別支援学校（聴覚障害）及び通常の学校に在籍する聴覚障害児と聴児の双方に対し、聴覚障害教員と聴教員が協働した聴覚障害理解教育プログラムの構成を提案することである。これまでは、聴児と聴覚障害児の障害理解教育は、別々に扱われる傾向があったが、本研究では両者を相互に関連するプロセスとして捉え、教員間の協働を媒介として、両者の変容を連動させる新たな教育モデルの構築を目指している。

第1章では、聴覚障害児の障害理解と教育的課題について、聴覚障害児が直面するコミュニケーション上の困難を整理し、手話の活用を含め、支援体制の必要性を論じた。また、通常学校における聴覚障害理解教育の現状と課題を概観し、障害理解教育の主となる理論や用語を明確化した。さらに、障害理解を支える教育的支援の在り方や教員の協働の重要性について論じ、本研究の問題と目的、構成を提示した。

第2章では、聴覚障害理解に関連する研究動向を検討した。聴覚障害児の自己理解やセルフアドボカシーに関する研究、聴覚障害教員と聴教員の協働に関する研究、聴児を対象とした聴覚障害理解教育の研究を整理し、その中で、聴覚障害教員が持つ専門性や当事者性を教育現場で十分に活かすためには、組織的かつ具体的な協働モデルの構築が不可欠であるという課題を提起した。

第3章では、聴覚障害教員と聴教員に対するインタビュー調査を実施し、両教員が考える聴覚障害理解の捉え方を比較し、認識の差異を明らかにした。障害理解教育において、聴教員は、事前に困難が想定される場面を見据えて、困難を回避・軽減するための指導を重視するのに対し、聴覚障害教員は困難に直面した際、具体的な対処や不安の軽減について共に解決するプロセスを重視していた。また、交流及び共同学習についても、聴覚障害教員が指摘する「お客様のよう感じ」という、障害のある子どもが対等な関係を築けていないという課題と、聴教員が述べた教員の説明の影響力を合わせると、教員が単に配慮を提示するだけでは不十分であり、個別の指導と集団の交流のいずれにおいても、双方の思いを伝えあう中で気づきを促し、本音で向き合わせる「対話を重視した指導」こそが、変容を促す共通の基盤であることが明らかになった。

第4章では、高等学校と特別支援学校（聴覚障害）高等部の1年間の学校間連携授業実践を分析した。授業開始当初は、高等学校の生徒は障害者を一方的に支援の対象とみなす固定的な障害観を持っていた。しかし、聴覚障害生徒や当事者教員と対話を通じた学びの中で、生徒たちは相手の思いを知ることにより、自らの支援が相手にとって必要なものかと自らの考えを振り返る、生徒自身の気づきが見られた。この気づきを経て、仲間として見つめることができるようになり、一方的な支援から「対等な関係」へと意識を変容させていった。こうした生徒の内面的な変化は、授業計画から聴覚障害教員と聴教員が協働し、生徒の気づきを大切にしながら授業を重ね、深い学びへと意識の変容を支えた重要な要因であると考察した。

第5章では、これまでの知見を統合し、各学部・学年段階に応じた適用可能な教育プログラムを提案した。本プログラムの特徴は、聴覚障害教員と聴教員の協働を媒介とし、「聴覚障害児」と「聴児」の変容を目指すことである。聴覚障害児に対しては、聴覚障害教員による「寄り添い・共感」を基盤とし、幼児期の自己肯定感の育成から中・高等部での社会資源活用へとつながる段階的な自己理解・セルフアドボカシーの育成を示した。一方、聴児に対しては、聴教員による「対話の保障・合意形成」の支援を通して心理的障壁を可視化し、共に環境を再構築する「他者理解」のプロセスを体系化した。

第6章では、総合考察として本研究の成果を総括し、聴覚障害教員と聴教員の専門性を相互に活かすための協調体制や、学校組織としての協議体制の構築について提言した。

本研究が提示した教育プログラムは、学級全体を一つの学習共同体として捉え、従来の二分法を超えた新たな「協働のデザイン」を示すものであり、学校教育における実践モデルとしての意義を有する。